

## まえがき

筑波大学の開設は、わが国の国立大学設立の歴史のなかでも、明治期の帝国大学の設置、第2次世界大戦後の新制大学の開設につづく第3の画期的な出来事であろう。それはまた、国立大学の施設建設という面では、大正12年の関東大震災後の、東京大学本郷キャンパスの建設に匹敵する大事業といえることができる。その際には、当時の建築学科の主任教授であった内田祥三氏の指揮のもとに建設が進められ、計画設計には岸田日出乃氏を中心とするグループがあたったことは有名である。

筑波大学の場合も、一般の大学建設の場合とは異なる独自の態勢をもってこの大事業にのぞんだ。その内容は8章に詳述するが、このような仕組みがなくては、現在のキャンパスの状態を実現することは困難であったであろう。

新構想大学として、あらゆる面に試行的プログラムを含んだ、ユニークなアカデミック・プランを空間的に実現するために、教育、研究、管理それぞれについて独自の検討を加えるとともに、スペース・スタディを通じて、筑波基準といわれる新しい施設需要面積基準を創設したのが第1の特記すべき点である。

また、大都市から遠く離れた田園地帯に立地しているという条件のもとで、250ヘクタールという広大な敷地面積をもつキャンパスに対して、都市計画的な計画手法を大巾にとり入れているのがこのマスター・プランの大きな特色である。さらに、キャンパス内に4,000戸を越す大量の学生住居を有することから、研究教育と居住との関係が追求されているのも特徴的といえよう。

この計画は単なるスキームではなく、一方では施設や環境をつくり出しながらの計画行為であったことから、生活の場としてのきめの細かい対応が必要とされ、建築の計画以外に、交通、緑地、実験廃棄物をはじめとする、さまざまな環境の造成についての計画、デザインがなされている。ひとつひとつのデザインの質もさることながら、生活環境デザインの総合的計画の1例としても参考になるものであろう。

筑波大学の計画が行われた1970年代に先立って、60年代には世界で注目すべきキャンパス計画が集中してなされている。アメリカではカリフォルニア州立大学のサンディエゴやサンタクルツのキャンパス、イギリスではサセックス大学、イーストアングリア大学、バース大学、ヨーク大学など、西ドイツではボフム大学やシュトゥットガルト工科大学、ベルリン自由大学、フランスのパリ大学ヴィルタヌーズ分校などはいずれも画期的な内容をもつものである。本書では頁数の関係でこれらの紹介は行っていないが、筑波大学の計画に直接、間接の影響を与えている。

わが国では、大学建設の計画記録がまとめられ、公表されることは少ないが、諸外国では珍しいことではない。60年代終りのボフム大学の計画、70年代ではリェージュ大学の計画などは刊行されて大きな影響を与えてきた。本書が今後の大学キャンパスの計画、ひいては生活環境のデザインについて、多少とも寄与できればこれに過ぎる光栄はない。